

顧頡剛遺稿二篇

陳 仲奇・邱 燕凌 訳注

訳者はしがき

「改造の拒絶から改造の受け入れまで」

「私の二年間の思想変化」

訳者はしがき

顧頡剛のこの二篇の遺作は、訳者の陳仲奇が2003年8月、文部科学省の科学研究費特定領域（A）東アジア出版文化研究の助成を受けて、「中華書局と中華人民共和国の古籍整理事業—『二十五史』の校点出版の背景」に関する北京の現地調査の際、顧頡剛の長女である顧潮から入手した内部資料である。

顧頡剛は、中国近代史学の重要な学派である「古史弁派」の代表的な存在である。1920年代、彼は胡適、錢玄同の影響を受けて、『讀書雜誌』第9号で、「錢玄同に与える古書を論ずる書」¹⁾を發表し、疑古史觀の代表的な言説「積み重ねて作られた中国の古史觀」（「層累地造成的中国古史」）を世に打ち出した。それは後に古史弁派の「疑古」的學術方法論となり、近代中国史学界における重要な旗印にもなった。

1949年に新中国政權が成立してから、顧頡剛は旧知識人の代表的な人物と見なされ、長い間、中国政府から思想改造を強要されていた。特に胡適との特別な關係故に、1955年以後は、政治運動が起こるたびに、彼は叩かれる羽目になっていた。1957年の反右派運動では、彼は病氣治療で9ヶ月入院していたため難を逃れたが、1958年には「白旗を抜く」という思想整風運動の荒波が猛威をふるい、彼は再び資産階級の史學觀との決裂を強要される瀬戸際に追い込められた。

1958年の中国では、反右派運動に引き続き、思想改造の嵐が中国全土を席卷した。3月10日、陳伯達が國務院の科学企画委員会第五回會議で「厚今薄古、辺幹辺学（現代を重視する立場から文化遺産を批判的に吸収する學問上の態度で実践しながら学ぶ）」の講話を發表し、「全国解放後、一部の資産階級知識人は現実から逃避し、実践や社会生活から離脱し、自分を象牙の塔の中に隠そうと考えている。それはもちろんプロレタリア階級の傾向ではなく、マルクス主義の傾向でもない」と旧社会から来た知識人たちに容赦なく矢先を向かせた。5月に、「白旗を抜いて、赤旗を掲げ」運動が空前の規模で全国的に展開された²⁾。「白旗」とは資産階級を代表し、赤旗は無産階級を代表する。この運動の矛先は旧知識人であった。著名な歴史学者である顧頡剛に対する風当たりは相当強かった。

顧潮によれば、顧頡剛は1958年2月から勤務先である歴史研究所と所属する民主党派である中国民主促進会の両方で思想改造に臨まなければならなかった。連日の會議で精神が常に極度の緊張状態に陥ったため、彼はひどい神経衰弱と持病の腰痛に悩まされ、苦しい

日々を送っていた³⁾。

この二篇の遺作は、いずれも当時の思想整風運動の中で書かれたものである。「改造の拒絶から改造の受け入れまで」は、1958年11月16日から12月10日まで開かれた中国民主促進会第四回第三次中央総会と第三回全国代表大会での発言原稿であり、「私の二年間の思想変化」は、1959年4月17日から29日に開かれた政治協商会議第三回全国委員会第一次総会での発言原稿であった。顧頡剛はその中で、自らの「資産階級世界観」の根源を掘り下げ、学術の使命感と現実社会との板ばさみ状態の中で、出来るだけ両立させようとする知識人の内心世界の苦悩を切実に訴えている。顧頡剛日記によると、1958年の中国民主促進会での発言は「好評」であり、民進第五回中央委員会委員に、また、翌年全国政治協商会議第三回委員に選ばれた。1959年の政治協商会議での発言は「周恩来総理の注意を得て」、知識人の置かれた苦しい立場を代弁した。

当時の中国共産党の知識人政策は、顧頡剛の例からはっきりとその特徴を捉えることができる。顧頡剛は思想改造を強要されながらも、政治的には重視され、重用されていたのである。それは、後の文化大革命時期における「反動的学術権威」のすべてが打倒される政策との相異が一目瞭然である。中国共産党は延安時代から、知識人を警戒しながらも、彼らの才能や知識を革命事業に取り入れるようとする統一戦線の現実的な要求から、知識人に対する思想改造を遂行してきた。その思想改造とはどのようなものであったのか、顧頡剛のこの二篇の遺作はそれを物語る典型的な一次資料であり、われわれはそれを通して得られるものが多いと思う。

以上が、遺族の許可を得た上で、顧頡剛のこの二篇の遺作を訳出して公開する所以である。なお、原文は大会での発言原稿であり、当時の臨場感と発言者の気持ちをより忠実かつ的確に伝えるために、訳文はあえて「です、ます」体にした。

「改造の拒絶から改造の受け入れまで」⁴⁾

顧頡剛代表の発言（1958・12）

主席、代表の皆さま

今回の第三回全国代表大会に出席し、数回に亘って指導者の演説と上層部からの報告を聞き、数か所の展覧会を見てまわり、十数回のグループ討論に参加したことによって、私は自分たちの会⁵⁾と自分自身のこれからの進むべき道を見極めることができました。私は周副主席〔周建人〕⁶⁾の開会の辞、王副主席〔王紹鏊〕の活動報告と車副主席〔車向忱〕が提案した組織改造計画（草案）を熱烈に支持します。ここで、私は謹んで自分自身の思想の発展過程をさらけ出し、在席の皆さまのご指導を願いたいと思います。

私は徹頭徹尾の旧知識分子です。私を「資産階級の知識分子」と呼ぶには、実は私のことをいかぶったものだと思います。本当は「封建地主階級の知識分子」と呼ぶべきです。私は旧家に生まれ、十数年に亘って私塾で勉強し、しきたりを重んじ、四書五経、封建思想が強く深く心の中に根付いています。その後、梁啓超の「新民叢報」を読み、徐々に改良主義的な政治思想をはぐくみました。北京大学に入学後、胡適のいわゆる「科学的方法」（実際はダーウンの進化論を俗化したもの）を受けて国故〔中国固有の学術文化、歴史文献全般を指す〕を整理し、そして、私はやっと部分的に資産階級の知識分子に転化し

ました。ですから、私は現在自分自身の思想を分析することにおいて、封建主義は私の身の処し方に表れ、資本主義は私の学術研究に表れていると考えます。三十歳以後、一つの形となったわけです。私の吸収した毒素の中で、最も深刻なのは「分工論」です。数十年來、ずっと学術的な仕事と政治的な仕事は必ず分けなければならないと考え、さもなくば、一方の手は円を描き、もう一方の手は四方形を描こうとするようなもので、結局、どちらもうまく書けないと考えてきたのです。私は自分がまったく政治的才能はありませんが、極めて高い学術興味をもっていると考えていたので、自分で計画を立て精力を傾け実践から離脱した紙上の学問に打ち込んできました。周囲の人々から「本の虫」、「考えが狭い、硬い」と笑われているが、私の心は少しも変わりません。

私が「象牙の塔」に閉じこもる生活に満足していましたから、ここ数十年の天地がひっくりかえったような激動の時代に身を置きながらも、革命と反動の境界をはっきり見分けることもできず、中国共産党に対しては、擁護もせずまた反対もしませんでした。国民党の反共内戦時期においても、私は何もしないでただ見ていただけで、どちらにもつきませんでした。当時、内心自分では超然とした態度をとっていると考えていましたが、実はこのような中間的な路線はただの実現不可能な幻想に過ぎなかったのです。人間は政治から完全に離脱することができず、私が革命陣営側に立っていなければ、必然的に反動陣営側に立つことになるのです。反動政権のために直接的、間接的に働いていることになるのです。

1949年の全国解放前夜、私は上海に居ましたが、多くの友人たちは私に「あなたの経歴からして、共産党が来たら、あなたをただでは置かないでしょう」と言って、台湾に行くように勧めてくれました。私は、解放戦争と抗日戦争とは性質が異なっていると思っていました。日本帝国主義は中国を侵略したのであり、私は彼らと共存できず、陥落地区を離れ後方に行かなければなりません。しかし、共産党と私は共に中国人であり、しかも、私は反共的な言論や行動をとったこともなく、社会の規律を守りながら、自分の仕事に専念してきたのですから、解放後も、恐らく私に何もしないだろうと思いました。蒋介石の反動集団である台湾の小朝廷に身を寄せて、何の意味がありましょう。このように考えていたので、私は留まったのです。

解放後、私は党の厳格な規律や幹部たちの質素な生活態度を目の当たりにして、心から感銘しました。けれども、上海は昔から「万惡の巢窟」と呼ばれ、住民の出身は非常に複雑であるために、流言も最も多くありました。農村では党の幹部に農民が抑圧され仕方なく木の皮や草の根をかじって飢えを凌いでいるなどと人々からよく聞かされました。また、大量の難民が上海市区に流れ込んだのを見て、私は大変疑念を覚えました。党は人民を解放するための党ではなかったのか、人民の中には農民が最も多い、なぜ、彼らに満足な食事を与えず、飢饉から逃れるために、都会に逃げ込ませているのかと心の中で思いました。私が故郷の蘇州に帰ってみると、商店街の店がどこもひっそりしていて、私が少し買物して店を出ると、すぐに乞食たちに囲まれ、身動きができなくなったほどです。私はさらに疑念を抱きました。共産党が政権を取ったのに、なぜまだ、これほど多くの寄るすべがない民衆が街頭をさまよっているのか。ずっと後になって、私はようやく分かりました。上海まで逃げ込んだのは決して貧農や中農ではなく、地主と富農だったのです。蘇州で乞食をしていたのも決して労働者たちではなく、地主と地主たちに頼って生きてきた人たちで

す。彼らはもともと革命されるべき対象なのです。私は彼らと出身階級を同じくし、気脈を通じていましたから、彼らを憎むことなく、かえって哀れに思ったわけです。もし私が自分の階級的立場を放棄し党に近づいていれば、このような無原則な同情心を抱くことがなかったことでしょう。

1952年、私は大学で教鞭を執るために、上海市の思想改造活動に参加しました。思想が改造できるなんて、私の古くさい頭では、これはまったく想像もできない不思議なことでした⁷⁾。私は学術的にも、道徳的にも、誰はばかることはないと言ってきた自信を持っていました。しかも、その年私はすでに60歳になり、蘇東坡の「人は老いて花を簪かざしみずかほは、花は老人かしらの頭のほに上るを羞はずるなるべし⁸⁾」を思い出して、自分のような年寄りが、またゼロからマルクス・レーニン主義の理論を学んで著作に取り組むなんて考えられません。記憶力も衰え、真に理解することもできないだけでなく、周囲からも身の程知らず、「邯鄲学歩」[他人のまねをしても、うまく行かず、自分本来のものまで失うことのたとえ]と笑われ、結局、新旧両方どちらも身につかず、両方うまく行かないことになってしまうのではないかと思いました。まして私の学術活動はただ客観的に古代史や古代の書籍を整理し、考証の文章をまとめるだけで、別に階級性とは関係なく、改造する必要もないようでした。このような逃避の考えをもっているために、その時の思想改造活動は私の頭の中でまったく作用しませんでした。今になって、反省してみれば、これが改造を恥ずかしいと言うよりも、むしろ改造に対して抵抗感があると言ったほうがよいでしょう。私の生涯において、封建的な家庭で無理やりに一種の組織的な生活を送ったことを除けば、社会人になってからは、個性を發展させ、勝手気ままにだらしない生活を送り、いつまでも気楽なほうがよいということしか知らず、指導に従うとか、集団生活とか、群衆路線のようなことは知らなかったのです。解放後、経済を安定させた党の政策や義勇軍の抗美援朝[朝鮮戦争のこと]におけるすばらしい勝利を目の当たりにして、感心せざるを得ませんでした。しかし、私は「己を捨てて人に従い」、自分の元来もっている最も大事な本領まで捨てて、党の言いなりになることに対して、やはり些か抵抗を感じていました。これは当時の私が自分の階級的立場を変えたくない気持ちの表れだと思います。

1954年、中国科学院歴史研究所に招聘され、北京で職をもつことになり⁹⁾、私は大変喜びました。「9・18事変」の後、私の生活は極めて不安定な状態にあり、多くの課題が心の中に留まって、ずっと研究に着手できないでいたのが、今度こそ、安心してそこで仕事に取り込み、次の世代に引き継ぐことができると期待していました。私は生涯書籍を好み、衣食を節約しても本を買いたため、大量にたまってしまいました。科学院が私に代わって北京までその書籍をすべて運び、そのうえ、広い屋敷に置いてくれました。私は政府の配慮に対して心から感謝しています。しかし、北京に到着まもなく、「あなたはこの数百箱の本によってだめになったんだね」とある幹部¹⁰⁾から言われ、私は思わず愕然しました。科学院は私がいくらかの史料を十分に理解していることを考え、私をここに呼んでくれたのだが、彼がこれらの書籍のせいで私がだめになったと言う。それでは、私をここに呼んだのはまったく余計なことではないかと内心に思っていました。しばらくして、またその幹部に蒋介石に対して幻想を抱いている云々と言われました。私は長年神経衰弱に患い、脳は緊張しやすく、また、気位がたいへん高く、他人のこのような理不尽な嫌がらせに対し我慢できないので、このような強烈かつ刺激的な発言を聞いて、目の前が真っ暗

になり、今にも倒れそうになりました。私は心の中でこう思いました。もし蒋介石と関係があったら、私もとっくに台湾に行ってしまう、上海に留まることがないのではないか。私はこれまでの人生で権力者に媚びるようなまねを軽蔑してきたのに、どうして共産党政権が安定してきたことを見計らって、寄ってきたと言われる筋合いがあるのか。確かに以前私は党に近づこうとしなかったが、今回北京で仕事をすることに同意したことがまさに党に近づきたいという意思表示そのものではないか。それなのに、どうして私が蒋介石に幻想を抱いていると言えるのか。これはまったく私に対する侮辱だと感じました。私はこれまでこういった侮辱を受けた覚えがありません。こんな攻撃に耐えられないため、公の場で発言するたびに、私は必ずこのことを取りあげてきました。1956年春、私は会のメンバーを前にして、こう発言したことがあります。「学問には際限がなく、個人の知識には限界があるので、驕ることはできないと深く認識しております。しかし、今、この幹部たる同志様はこのような政治的優越感をもっています。だとすれば、私もやむを得ず学問的な優越感をもたざるを得なくなりました」。あの時期、幹部に対する私の反感は大変強く、その後の右派分子が言うところの「礼賢下士」[学識のある人に対して、へりくだって交わること]、「素人は玄人に対して指図ができない」、「党委員会は学校から退去せよ」などの言論と気脈を通じていました。反右派運動が私を救ってくれなければ、私は間違いなく右派分子となってしまったことでしょう。今年の整風運動において、比較的深く勉強することを通じて、自分がずっと反動的な立場に立っていたことを自覚し、例の幹部同志が私に対して懐疑心と憎悪を抱いたのが分かりました。私は毛主席の「党の作風を正しくせよ」¹¹⁾の指示を読み、初めて真の学問とは、書物の知識を自ら体験した生産闘争と階級闘争に結びつける中で得るものであることを知りました。私の知識はただ書物の中を行ったり来たりした、偏った生半可なものであり、まして私はこれまでにマルクス・レーニン主義を基礎とした研究をしたことがなく、さらに、生産闘争と階級闘争の中で実践したこともありません。当然研究すればするほど、間違ってしまうことになるでしょう。そこで、私は自分が確かにこの数百箱の本によって、だめになったことがようやく分かりました。また、自分の長年の研究は、主観的には動機は純学術的で政治から離れているが、客観的にはその効果は確かに反動政権のために働くものとなっていました。反動政権のために働くものとなった以上、思想体系も当然蒋介石集団と結びついてくるのです。その幹部同志が革命的な立場に立ち、私に一喝し、私自身にこの道理に気づかせ、根本から両面性を排除することが、本当に私に対する最も重要な支援でした。当時、私は旧社会の排他的な目で彼のことを判断し、彼が学術研究の尊厳を傷つけたと思いこんでいたため、彼と対決しようとしたが、これは私の思想レベルが低いことを物語っています。今や納得し、私は今年科学院で大字報「文革中に流行した壁新聞」を張り出し、彼に呼びかけました。「以前あなたが私を批判したのは、立場を変えない私が毒素を撒き散らすことを危惧し、私に境界線をはっきり示したかったためでした。今や私は自分の過ちを認識し、過去の自分と妥協なき闘争を行うことを決めました。よって、今後われわれ両者が誠意をもって一致団結し、継続して私の自覚を高め、徹底的に立場を変えるようにお願いします」。

党の指導を受けた最初の七年間、私はいつもこのように懐疑的で、いつも不平不満を口に、党と対立する立場にいました。しかし、私は意識的に党に反対するのではなく、自分が善悪を識別する良心があると信じていますから、この三年間現実を見ての教育を受け、

最終的にだんだんと思を変えてきました。

1956年夏、私は全国人民代表大会と政治協商会議の代表たちと一緒に東北を視察し、鉄鋼の都・鞍山と石炭の都・撫順を訪れ、また、北大荒〔黒龍江省北側の未開発地帯のこと〕の農業と小興安嶺〔黒龍江省にある地区名〕の林業を見てまわり、祖国の工業、農業建設の偉大な成果を知りました¹²⁾。そのほかに、たくさんの生産ラインと综合利用〔各業界の間だけでなく、他業界との協力関係ももつこと〕を通して、至るところで資源の役割を十分に発揮させ、時間と労働力を節約したのを見ました。私は心から喜んでおりました。第一次五ヵ年計画が、これほどのすばらしい成果を挙げたので、将来全国で工業の現代化と農業の現代化が実現されたら、どんなにすばらしい発展となるものかほんとうに楽しみです。この年の冬、私は広西を視察しました。全省民族民間芸術大会に出席し、各兄弟民族が仲睦まじく、互いに偏見を捨てて、相手の長所を見て、共に文化のレベルを高めているのを目にしました¹³⁾。また、各県でのさまざまな規模のダムの建設と農業の増産、人民の生活レベルの急速な向上を見て、昔から貧困で知られていた省でさえもこれだけに発展してきたのだから、比較的豊かな省はもう言うこともないだろうと私は分かったのです。二回の視察を通して、私は党の企画のすばらしさと計画性の正確さ、党の決めた方針や政策がすべて正しいことをはっきりと認識することができました。それは、自分が以前党に対して抱いていた不信感を一掃しました。これが私の最初の目覚めです。

1957年夏、右派分子が党の作風を正す運動を利用し、党に対して攻撃を開始しました。これらの右派分子には、私の知り合いが多くおり、よく知っている友達もいました。その時、私はちょうど小湯山療養院で病気の療養をしていて¹⁴⁾、毎日新聞を読み、最初は彼らの議論をととても新鮮に感じ、一部は道理に合っていると思い、共感を抱きました。しかし、一部の発言は言いすぎであり、まったく罵りかひどい冗談だと思い、私も賛成できませんでした。6月になると、労働者の反右派運動が起き、彼らの陰謀活動が一つ一つ暴露され、それに私は大いに驚きました。それまで私は、彼らがただ愚痴をこぼし、意見を発表したただけだと思ったが、まさか組織的計画的に反党活動を行い、甚だしきはハンガリー式のクーデター¹⁵⁾を引き起こし、共産党政権を打ち倒そうとまで謀ったことが分かり、私はほんとうに憤慨しました。中国は百年あまり帝国主義に圧迫され、亡国寸前となり、苦しみを味わいつくした後、幸運にも中国共産党と毛主席の英明なる指導のお陰で、弱者から強者に、貧困から豊かに、人民の生活と道徳の水準はたえず高まり、すべてが乗るべき軌道に乗り、変化を見せていないところは一つもなく、人々は世界に胸を張って立つようになりました。このような空前の革命成果を前に、なお故意に破壊活動を行い、中国を後退させ、組織も紀律もない、実際には帝国主義に依存して生存する半植民地的な国家に戻そうとした彼らは、民族の永遠の罪人ではないでしょうか。また、自分のことを思うと、幸いにも私が病気であったため、彼らから仲間誘われずに済みましたが、もしも病気でなければ、再三自宅を訪ねて来た彼らに対して、その企みをまったく識別できない私が果たして彼らの誘いをきっぱりと断ることができるでしょうか。ここまで考えると、思わず寒気がするほどです。なぜならば、私は昔から「来る者は拒まず」、「求めがあれば、必ず応ずる」からです。反右派運動の教育の中で、政治を大事にしなければならない、是か非かはっきりしなければならない、立場を変えなければならないことをよく理解できました。このような思想的境地に達するためには、まず個人主義的な情け深さと自由主義的な交友

から決別しなければならぬのです。これが私の二度目の目覚めです。

今年の2月から8月まで、私は科学院の双反運動⁶⁾とわれわれの会の整風運動に参加しました。私は自分の思想を深く掘り下げ、初めて幼少時代から成人になるまでの自分が、ずっと順調な環境の中で育てられ、優越感を強くもち、そこから個人英雄主義的な考えを奮い立たせたことに気づきました。私は自分が中心となり資料を収集し、計画を立て、非現実的な高望みをし、同好の士を集め共同研究を行い、一つの学派を立ち上げてきました。これは「名」に拘る強い気持ちの表れです。この目標を実現させるため、また、仕事を順調に進展させるために、各方面と連絡をとらなければなりません。これはまた「利」に対する執着心です。以前は、自分が名利思想をもっている自覚がありませんでしたが、この時、事実を前にし認めざるを得ませんでした。それまで自分の学術的発展を制限してきた思想的、精神的負担から解放されました。道徳に関して言えば、私はこれまでずっと「絶対に良心に恥じることはない」[原文、不欺暗室]、「人に言えないことは無い」という信条を自負してきたが、今や、このような封建的道徳が封建社会の統治階級の個人主義的な道徳だと分かったのです。私は権力や利益を他人と争うことはありませんでしたが、生まれながらに恵まれた地位にいたため、常に高いところから人民の頭を抑えつけていたのでした。社会主義社会の団体主義的道徳と比べたら、私の道徳はあまりにも小さいものです。しかも、封建的道徳はもともと当時の統治階級のためのものですから、もし、そのまま新社会にもってくると、反動的な行為になるはずですが、ここまで掘りおこし、私の道徳的な重荷をやっと捨て去ることができました。この問題に関しては、たくさんの具体的な事例があり、私はすでに反省書の中でできる限り明らかにしました。これは私の三度目の目覚めです。

今年6、9、10月の前後三回に亘り、全国政治協商会議で河北、河南、湖北の三省に工業建設、農業増産と人民公社の創立を見学に行きました¹⁷⁾。私たちは、党の指導の下、かつての水害、旱魃、霜の被害、虫害などの災害や災難の多発地区が、豊かな水田に変貌し、生産量がムー〔1ヘクタールの15分の1の面積〕当たり500キロの目標から驚異的な5、6万キロに増産したのを目の当たりにした。人民公社が成立してから、人民はみな組織下に置かれ、男女問わず皆労働者で、皆農民です。また、皆民兵であり、知識分子であります。全国民が動員され、鉄、鋼、石炭の製造に参加し、至るところ「小、土、群」[小規模、民間的な方法、群衆の知恵の略語]、文化的教養水準も急速に高められ、各県には県立大学を創っただけでなく、一つの郷に複数の大学を創設した例もありました。このさまざまな神話のような奇跡は、決して天が与えてくれたものではなく、党が人民を組織し、人民を指導し、人民を信頼した結果なのです。人民の認識を高めることは、決して簡単ではなく、下級幹部が自ら師範となり、根気よく説得した結果です。私が最も感動したのは、遼平県の高参農民陳家正の物語です。彼はもともと農業経験のある人で、幹部が試験畑を作り、小麦の生産量をムー当たり1000キロに設定したのを見て、ただ無理なことだと内心に思ったのです。しかし、人に落ちこぼれと言われるのを恐れ、口では何も言わず、ただ毎日畑に見に行っていました。収穫の時期になると、陳さんは1600キロの生産量に達したのを自分の目で確かめ、やっと心より感心したということです。この事実が彼の党に対する態度をすっかり変えました。彼は一つ唄を詠みました。最後のところはこうです。「小麦の産量三千八百、人々知ってみなほめる。私はそばでただ笑顔、共産党はすばらしい。試

験畑はよい方法。保守病治り、嬉しいや嬉しい」。彼の年齢は私とほとんど同じであり、彼の懐疑的な考えと保守思想も私と似ています。ですから、私に与えた印象が最も深いです。私が思いました。まもなく私の職場にも必ずこのような奇跡が起り、私もきっと陳家正同志と同じように心から喜ぶでしょう。これは私の四度目の目覚めです。

このたび、わが会は準備会議期間中に、「全国工業交通展覧会」と「教育と労働生産を結ぶ展覧会」を見学し、これもまた私の精神に大きな衝撃を与えました。これは、工業、農業、教育、文化の大結合であり、文化と技術の大革命であり、頭脳労働と肉体労働の差別をなくし、全国民を教養があり、なおかつ技術もある労働者に育成させるための基盤作りでした。そこで、工場、農場、学校の三機関は連携をとり、相互協力し、工事現場を教室に、生産過程を教科書に、労働者と農民を先生として、生産、教育、実習を三位一体の形を作り出しました。労働者も農民もまた知識水準を高めることによって、生産をさらに向上することにつながり、教育と生産が相互的に促進し、共に限りなく発展することとなるのです。展覧会で、私が最も感動したことが二つあります。一つは、どの工場或いは農場も生産の場であるだけでなく、また研究機関となり、それぞれの労働者や農民が深く研鑽琢磨するのに便利な環境が備えられ、そのため、共産党と大衆に推し進められて、数え切れないほどの「労働者発明家」、「技術革新の達人」、「青年技術革新家」が出現しました。十五歳以下の少年の労働者と中学、高校の学生がもう新しい機械を創造することができ、幼稚園の子供たちも農業の手伝いができ、皆が自然を征服するというような抱負と能力もっています。こうして、生産力が解放され、個人の知恵も解放されました。毛主席の「六億神州舜堯に尽く」¹⁶⁾が証明されたのです。もう一つは、私は以前、西北、西南の幾つかの辺鄙な省に行ったことがあります。それらの省は文化が立ち遅れ、手工業の製品でさえも幾種類もありませんでした。ある省の唯一の中学校〔中国のいわゆる「中学校」は、一般的に六年制で、日本の中学校、高等学校に相当する〕では、プレゼントとしてももらった物理精密機器を使える物理の教員がおらず、ただ骨董品として応接室に置いてあるだけのを見ました。私はいつも思っていました。これらの地方が沿海地域の文化水準に追いつくまでは、恐らく五十年もの歳月を待たなければならないだろうと。ところが、思いもよらず、解放後十年もたたないうちに、これらの地方の工業製品も国際水準に接近し或いは国際水準を超えました。この明らかな事例がすぐさま私の頭の中に潜んでいる「地理環境決定論」を根底からくつがえしました。党の大衆路線がこんなにも正確でかつ有効であったからには、私たちはどうして党に対して懐疑心を抱くことができましようか。これは私の五度目の目覚めです。

総じて言えば、中華人民共和国が成立された以来、人は至るところで教育を受ける機会を得たのです。学校での学習はもちろんのこと、労働の中でも見学の中でも教育を受けることができました。他人が教育されるのを見ることも即ち自分が教育を受けることにもなります。このような時となって、初めて教育たるものの真意が分かったのです。古人は「三十にして立つ、四十にして惑わず」と言い、あたかも三、四十歳以後はもう進歩することができない、また進歩を求める必要もないと言っているようです。これは今日から見ると、言うまでもなく大きな誤りです。七年前に、私は思想改造から意識的に逃避しようとし、種々の学習に対しても、まじめな態度で臨まなかったのは、即ちこのような間違った思想の表れです。私は今日このような過ちを批判することができたのは、即ちここ三年

来、党の教育を受けた結果なのです。しかし、私は旧社会から来た、封建主義の下に育てられた人間なのです。私はさらに長期間かつさらに厳しい教育を受けなければなりません。こうして、初めて自らを真に新たな人間に改造することができるのです。

王副主席の活動報告と車副主席が提案した改造計画を読み、そこに書かれているわれわれのメンバーに対する具体的な要求を私は全面的に受け入れます。第一、私は年老いているが、私の積極性は未だに減退していません。私は必ず自分の仕事の中で、意欲的に正しい思想に基づいて学術研究を進めます。私が研究しているのは古書籍、古史文献で、「厚今薄古」[現代を重視する立場から文化遺産を批判的に吸収する学問上の態度]の方向に適応しないようですが、批判することができ、「古為今用」[昔のものを現在に役立たせる。]の目的が達せられさえすれば、新たな情勢のために貢献することができます。第二、肉体労働に参加し、労働者、農民大衆の中に入って自らを鍛えます。これは私が最もやりたいことです。旧社会では、私は労働に参加する機会がなく、書斎での仕事が多すぎたため、強度の神経衰弱にかかりました。しかし、幸い私は体が動けるので、この体を活かし参観や調査の機会を利用して、一年間に労働者、農民大衆と三、四ヶ月の共同生活を過ごし、彼らから積極的に努力する精神を学び、自分の労働観点、生産観点と大衆観点を作り上げていきます。第三、大衆観点をもちながら、組織的な生活に取り込み、そうすることによって、過去の自分一人でことを進めるやり方を矯正し、強い決心で階級的立場の改造に臨み、自分を社会主義の軌道に乗せ、一人の普通の労働者となり、封建社会のいわゆる「士大夫」の腐った根性を消し去ります。第四、この「一日が二十年に等しい」大躍進の情勢の中で、社会の発展は極めて急速です。もし自分の政治理論と思想水準を高めなければ、きっと頭が混乱し、進むべき方向を見失うことでしょう。ですから、これからは必ず理論を研究し、また実践を重視し、実践と理論をいつまでも結合させ、分離することがないようにしなければなりません。一言で言えば、政治思想を統帥とし、職場を基地にして、業務実践と労働実践への参加を基礎にし、自分の潜在力を発揮しながら社会主義の路線を進むことです。私は今日ここで同志の皆様に誓います。自分がいつまでも時代と共に前進するため、また、この空前絶後の新しい中国に生きることを無駄にしないため、どうか、常に私の行動を指導し、私の誤りを正すようお願いいたします。

それでは、皆様のご健康をお祈りします。

「私の二年間の思想変化」¹⁹⁾

政治協商会議全国委員会委員 顧 頤剛

主席、委員の皆さま

中国人民政治協商会議全国委員会が1957年2月に第二回第三次全体会議が開催されてから、今回の第三回第一次全体会議の開催まで、すでに二年あまり過ぎました。二年間は、あまり長い時間とは言えませんが、しかし、この二年間に、反右派運動のような政治闘争と整風運動のような思想戦闘があり、労働者、農民大衆の全面的な大躍進の生産戦闘や全国的な農村の人民公社化運動がありました。この一連の闘争と運動はみな歴史上未曾有のもので、また、戦果も極めてすばらしいものでした。私は幸いにも政治協商会議と中国民主促進会に参加し、これらの闘争と運動を自ら体験し、さまざまな方面から教育を受けました。そして、いつも落ちこぼれの私が進んで自分自身の根本改造に乗り出そうとするよ

うになり、そのうえ、社会主義建設事業のために、自分の力を出したいと思うようになりました。

私は旧社会で五十年あまり生活し、地主階級思想と資産階級思想の長期的影響の下で、個人主義の泥沼に深く入っていたにもかかわらず、まったく自覚していませんでした。私は生涯学問研究を目的とし、自分で計画を立ててそして実行するようしてきました。そうすれば、祖国と人民のためになると思いこんでいたのです。学术界には、研究資料が尽きることはありません。私は考証学の伝統を受け継ぎたいと思っていましたが、不安定な時代環境に身を置いていたために、前代の学者のように順序正しく学習することはできませんでした。私は自分の知識が不足しているので、一生懸命に努力し前人に追いつくことができれば、初めてその方面のすべての知識を把握することができると考えておりました。そのため、長年来業務に没頭して、業務のほかにも、業務を指導する政治と理論が存在していることを忘れていました。その結果、政治と理論を軽視しただけでなく、毎日新聞を手にとっても、ただ大きいタイトルに目を通すだけで、政治闘争に対してははっきりした認識を抱いていませんでした。解放後、マルクス主義の無敵な威力を感じ、人民政権と反動政権の本質的な相異を認識することが一応できました。しかし、ひとたび自分に結びつけて考えると、自分は昔から政治には無関心の人なのに、どうして政治と関わりをもつために、業務時間を割らなければならないのか。そのうえ、記憶力も衰え、読んだものもすぐに忘れてしまうのだから、また、「夕陽無限好、只是近黄昏」[夕日こよなく美しけれど、いかんせんたそがれすでに間近し。人生が晩年になり、事業などが下り坂にあることのたとえ]の感は免れない。年配者が若者を見習う必要があるのか、「画虎不成反類犬」[虎を描いて犬に似る。すぐれた物事をまねて失敗し、見苦しい結果となる]となるのが落ちだといつも思っていました。また、私は数十年の書齋生活を送り、安らかな気持ちに慣れていたので、他人に批判されても、耳をふさいで聞こうとせず、いつもどおり自ら楽しんで学問の本業に自己満足しながら没頭してきました。

1954年、中国科学院歴史研究所に研究員として赴任することになり、私は非常に喜びました。というのは今後の生活問題が解決し、さらに研究に専念することができると思ったからです。歴史科学はもともと政治的戦闘性をもつ科学ですが、私は常々研究においては、分業をしなければならないと考えていました。理論の分野には理論分野の担当者が当然いるのだから、私は史料の整理方面だけに専念すればよいと考えてきました。しかし、思いもよらず、北京に着いてからは、さまざまな政治運動が次から次へと起こり、十分な時間を得て研究に専念することができないばかりか、政治協商会議の特別委員に入れられ、会議の回数はさらに増え、自分の計画が完成できないだけでなく、科学院から割り当てられた任務でさえも時間通りには提出できず、内心たいへん悩んでいました。会議の知らせが来るたびに、「ああ、今日もまた一日なくなった。これじゃ、どうして業務に集中できよう」といつも嘆いていました。この退くもならず進むに道もない不安な気持ちを抱き、自分では身体のすべての機能に衰えが現れ、自分が本当に老いたのだなあと思いました。

1955年、友達の紹介で私は民進会に加入しました²⁰⁾。当時、私は自分のような専ら学術をする者が民主党派に入ってもあまり役に立たないのではないかと考えていたが、友人の厚意を断りきれず、とりあえず名前だけ入れてもらおうと思って承知したわけです。一年後、思いもよらず中央委員に選ばれたのですが、これは名誉職だと思い、自分の負うべき

責任についてはあまり考えませんでした。昼も夜も私はいつもこう思っていました。私の一生の中で、仕事の時間は長くても十年に過ぎない。どうすれば、このような環境の中でできるだけ時間を作り、自分のしたい、できる仕事をし、後世に実りの多い貢献ができるのか。私にとって、民主党派はあってもなくてもよい、とるにたらないものでしかなかったのです。

1957年春、夏の間、思いがけず右派分子が中国共産党の整風に協力する機会を利用して、党に対して死に物狂いの攻撃を行いました。6月以後、労働者、農民大衆が大規模な反右派運動を起しました。この間、私はちょうど病気の療養中で、詳しく新聞を読む時間がありました。毎日新聞を開くと、必ず一人か二人の友人が右派とされた記事が目に入ります。しかも、これらの友人は、ある者は学問があり、ある者は才能があり、往々にして私の敬服していた人物です。私は最初疑っていましたが、しばらくして、彼らを憎むようになり、最後には、ようやく自分の思想状況に結びついて考え、深く反省し、自分自身にも少なからず右派的な思想傾向があることを認識するに至りました。しかし、その頃、反右派言論の中には、私たちのような旧社会から来た人のことを「資産階級の知識分子」と呼び、「無産階級の知識分子」とは異なる範疇に属することを示し、そのうえ、厳しい批判を浴びていたことに、私は再び反感を抱きました。政治思想なら確かに無産階級と資産階級の区別はあるが、客観的な科学には決して人の出身階級によって異なるものではない。どうして一緒に否定する必要があるのか。ずっと後に、「紅」[政治思想、政治態度が共産党政府と一致することを指す]と「専」[学術業務レベルが専門家であることを指す]のことが問題となり、初めてすべての学術は皆政治に従属するものであり、科学者が先「紅」後「専」すべきこと、徹底的に「紅」してから「専」を追求してこそ、人民のために奉仕することができることが分かったのです。

このような基本的な認識をもつようになってから、1958年に、私は心から承服し民進中央の整風運動に臨みました。「交心条」[自己批判する告白文章]も多く書きあげ、同志たちも容易に私の欠点を見出し、私のこれらの欠点を直すために助言してくれました。一年近くの時間をかけて自分の思想と行動を細かく分析・批判し、初めて私のさまざまな間違った思想の根源がほかでもなく個人主義にあり、資産階級的だけでなく、地主階級的なものでもあったことが分かったのです。同時に、自分のような党に近づかない人をどうして党が再三に亘り説得したかも分かりました。それは、旧知識分子に対する団結、教育、改造の政策に基づき、私に社会主義路線を歩ませ、偉大な祖国を建設するために微力を尽くすようにするためです。党がこんなに私に望み、期待していたにもかかわらず、私は分けも分からずにまだ旧いものを新社会にもって来ようとし、新社会の精神的様相をまったく深く知ろうとせず、その結果、学習を嫌い、会議を避け、矛盾に満ち、うまく行かないことは他人のせいにしていました。それでも、党は私を見捨てることなく、民進会の整風運動を通して、私を教育しました。これはほんとうに手厚いもので、私は感激し、後悔せずにはられません。反右派運動は私を一喝し、整風運動は一年半の時間をかけて、私を迷夢の中から救い出してくれたことに感謝します。

去年から今年まで、政治協商会議が数回に亘り、私たちに見学と視察の機会を与えてくれて、私は河北、河南、湖北、湖南の四省に行ってきました。労働者、農民の大躍進運動、人民公社化運動の中で、私たちは都市と農村の繁栄状況と労働者、農民大衆のたいへんな

意気込みを目の当たりにし、新しい生命力を受け取り、私の思想レベルを高め、そして、私も労働者や農民について一緒に進歩したいという願いを抱くようになりました。私は旧社会では、旅行が好きのため、何回も農村や辺境地区を訪れ、当時の帝国主義分子の横暴や官僚資産階級の腐敗と残虐、そして、農民の破産、人民が離散してさまよう様子をこの目で見てきました。これらの悲惨な状況がまるで一枚一枚の絵のように深く私の頭の中に焼き付いていました。解放後、抗美援朝〔朝鮮戦争〕運動の偉大な勝利を知って、私は初めて祖国が強くなったことを知ったのです。今、外を歩いて大躍進の成果を見ると、私は祖国が豊かになったことが分かりました。旧社会にいた私は愛国心を些かもっていたために、随所で絶望の悲しみを感じていました。現在、党はすでに一本の光明の道を創り、誰もが才能と力を発揮することができ、大自然も人民のために奉仕し、至るところで改造が進みました。これまでの状況と比べてみて、私は興奮と喜びで胸がいっぱいになります。私たちは鄭州の東風渠〔灌漑用の水路〕で「昔日、蒋介石の花園口〔河南省の黄河流域の地名〕を打ち開き、千里に危害するのを恨み、今朝、共産党の東風閘を建設し、万民に造福するのを喜ぶ」という対聯²¹⁾を見かけました。同じ鄭州の黄河なのに、反動政権は人民を害するために使いましたが、人民政権は人民のために使いました。これは地獄と天国の差ではないでしょうか。われわれはこれ以上政治に無関心でいて、また、改造を受け入れず、党の指導に従わなくていいのでしょうか。

李富春副総理が今回の報告の中で、「労働者大衆は自分たちが彼らの使用している設備と道具を最も熟知しているし、彼らも革新することを望んでいるはずです。……われわれは全国の工場、鉱山、各企業がみなこういう方面の経験を発揮するように呼びかけたい。……これらの老朽化された設備を若返らせ、新しい設備に新たな花を咲かせ、積極的に現有の生産設備の潜在能力を掘り出さなければならない」と述べましたが、そこから、私は思い出しました。今回の見学で、地方の工業に使われている多くの機械は、もともと上海の工場の廃棄物として処分されたもので、労働者たちの手によって新たに生命力が蘇り、まるで新しい機械のように生産現場で活躍していました。また、鄭州の紡績機械工場の中に、その地域の人民公社が小さな工場を立ち上げたのを見ました。その鉄筋工場の原料は機械工場の廃材、製紙工場の原料は機械工場の廃紙、アルコール製造工場の原料は機械工場の米のとぎ汁でした。役に立たない人はおらず、役に立たない物はないのです。孫中山先生がかつてこう言ったことがある。「土地はその利を尽くす。人はその才を尽くす。物はその用を尽くす。」当時、これは一種の理想的な考えでしかありませんでしたが、今や、一つ一つみな現実となりました。これはなんと嬉しいことでしょうか。老朽化した機械や廃材でさえもなお修理と加工を通して、新たに役に立つことができるのですから、どうして私という人間と私の知識が改造を経て若返ることができないのでしょうか。私は現在すでに十分に認識しています。毛主席が提出された六か条の政治基準²²⁾に従い、自己改造に励み、自分の過去の人生観を否定し、学問を治める方法を正し、そして、社会主義学院の勉強に参加し、自分の理論水準を向上させ、労働実践を通して、立場を変えることさえすれば、私も新社会の需要に適應し、全力を尽くして社会主義に奉仕することができます。そうすれば、私は本当に若返ることが出来るのです。無論、改造は長期に亘り、苦勞を伴い、なおかつ複雑です。しかし、私は受ける決心があります。また、実現する自信もあります。私はこの大会において、皆さまを前にして、ここで誓います。

注

- 1) 顧頤剛「与錢玄同論古書書」『古史弁』第一冊、上海古籍出版社、1982年、58—61頁。
 - 2) 1958年の「白旗を抜いて、赤旗を掲げ」運動は「厚今薄古」運動とも称す。文化學術研究領域における思想整風運動である。具体的な経緯は以下の通りである。3月10日、陳伯達が、國務院の科学企画委員会第五回会議で「厚今薄古 辺幹辺学」の報告を行った。4月28日、范文瀾が「人民日報」で「歴史研究には厚今薄古が必須である」という論文を発表。5月「白旗を抜いて、赤旗を掲げ」の運動が全国に展開され、陳寅恪ら知識人が衝撃を受けた。6月11日、郭沫若が「人民日報」で「厚今薄古の問題について」という書簡を掲載、陳寅恪を名指して批判。7月、陳寅恪が中山大学学長宛てに辞職願を提出したのである。この運動は1958年2月～8月の間に行われたが、多くの知識人たちが資産階級の「白旗」とされて衝撃を受け、顧頤剛も歴史研究所の「重点人物」と見なされ、絶えず「資産階級學術思想」の自己反省、自己批判を強要されたのである。
 - 3) 顧潮『歴劫終教志不灰—我的父親顧頤剛』（以下、『我的父親顧頤剛』と略す）、華東師範大学出版社、1997年、281頁。
 - 4) 1958年11月16日～12月10日中国民主促進会4届3中全会及び第三次全国大会に出席した時の発言である。12月4日の日記には、「一つの発言原稿が4度も書き直して、今日はだいたい決めた、もう才能の限界を感じている」。7日、大会で発言し、たいへんな好評を得た。9日、民進中央委員会委員に選ばれた。この発言の要約は1958年12月18日『光明日報』に登載された。
 - 5) 中国民主促進会のことを指す。中国民主促進会は1945年12月に上海で成立されたが、初期メンバーは主に中日戦争期間中に上海に留まった進歩的な文化教育界の知識人であった。重要メンバーは馬叙倫、王紹鏊、周建人、許広平、林漢達、徐伯昕、趙朴初、雷潔瓊、鄭振鐸、柯霊などである。1949年9月、馬叙倫、王紹鏊、周建人、許広平、雷潔瓊などが政治協商会議第一回会議に出席し、『共同綱領』の制定に参加し、新中国の誕生に貢献した。中国民主促進会は1950年、1956年、1958年、1979年、1983年、1988年、1992年、1997年にそれぞれ第一回、第二回、第三回、第四回、第五回、第六回、第七回、第八回全国代表大会を開き、馬叙倫、周建人、葉聖陶、雷潔瓊は歴任の主席に選ばれた。1997年の第八回全国代表大会で雷潔瓊は名誉主席になり、許嘉璐が主席と選出された。現在、会員数7万人余。(中共中央統一戦線工作部ホームページ <http://www.zyztb.org.cn/>)。
- 顧頤剛は1955年10月に中国民主促進会に入会したが、1956年の第二回全国代表大会で第四回中央委員会委員に当選された(顧潮『顧頤剛年譜』中国社会出版社、1993年、357—359頁)。
- 6) 顧頤剛原注と区別するため、訳者による文中の注はすべて [] で示す。
 - 7) 『顧頤剛年譜』、1月から8月まで復旦大学兼任教授を務める。2月初め、「中国民族史料」の授業を担当する。3月初め、思想改造のため、授業が中止になった。また、1月から9月まで上海学院の兼任教授を務める。1月から6月まで「古籍整理」の授業に『論語』をテキストに教えた。7月から9月まで、上海学院で思想改造運動、三反運動に参加した。7月初め、簡単な『年譜』を作り、反省書として使った。7月9日、運動が正式に始まった。この日の日記には、「今回の学習は、恐れることに三点が挙げられる。天気が暑くて、耐え難い。刺激が強くて、連日、安眠できない。会議が多すぎて、自己批判の資料を書く時間がない。」と記している(345—348頁)。
 - 8) 蘇軾「吉祥寺にて牡丹を賞す詩」、「人老簪花不自羞、花応羞上老人頭」。
 - 9) 『顧頤剛年譜』、2月に中国科学院に招聘される。3月、劉大年が北京から上海に出向き、招聘されたことを聞いた。歴史研究所内の事務室も決まった(351頁)。

- 10) 顧潮によれば、「ある幹部」とは、当時科学院歴史研究所の副所長である尹達のことである（『我的父親顧頡剛』281-282頁）。
- 11) 毛沢東「整頓党的作風」。1942年2月1日中共中央党校の開学式における演説である（『毛沢東選集』第三巻、人民出版社、1953年）。
- 12) 『顧頡剛年譜』、5月16日～7月1日、政治協商会議が主催した視察活動に参加し、東北三省の瀋陽、大連、旅順、鞍山、扶順、安東、長春、吉林、ハルビン、佳木斯、牡丹江、チチハルなどの12都市、9県及び郷、鎮を回った（359頁）。
- 13) 『顧頡剛年譜』、11月21日、政治協商会議が主催した視察活動に参加し、広西チワン族自治区の南寧、憑祥、百色、柳州、桂林の五つの市またそのほかの五つの県を見学した。途中で「広西視察日記」を記した。翌年一月に帰京（359-360頁）
- 14) 『顧頡剛年譜』、4月20日、小湯山療養院で療養する。6月30日、小湯山療養院から帰京。（p.361）
- 15) ハンガリー事件を指す。1956年、非スターリン化を求める一連の市民運動が起き、政府側と武力衝突に至り、ソ連軍の介入で事件が沈静化され、親ソ政権が立てられた。
- 16) 反右派分子、反右傾思想の略称。1957年4月27日、中共中央が「整風運動に関する指示」を全国に発表し、最初は党内の官僚主義、主観主義、宗派主義を一掃する目的で整風運動を開始したが、民主党派から共産党に対する批判は予想以上過激になり、やがて毛沢東が右派に対する反撃を始めた。これは、すなわち反右派運動である。1958年2月以降は、反右派運動の延長線で、右派分子に対する批判と、個人が自らの右傾思想に対する「検討」（自己反省）を同時進行した。これが整風運動の第四段階と称された（中共中央文献研究室編『周恩來年譜1946-1976中巻』中央文献出版社、1997年、135頁）。
- 17) 『顧頡剛年譜』、6月29日～7月3日、政治協商会議の同人たちと一緒に天津市の楊柳青を、9月13日～30日、政治協商会議の同人たちと一緒に河南省の鄭州、信陽、遂平、湖北省の武漢などを、10月16日～25日、政治協商会議の同人たちと一緒に河北省の徐水、安国などの地方を視察した（364頁）。
- 18) 毛沢東「七律・送瘟神」その二の詩句。この詩は毛沢東が1958年6月30日の『人民日報』の余江県が最終的に血吸虫を撲滅したというニュースを読んで、感激して不眠し、翌7月1日に書き上げたものであるが、公開発表されたのは同年10月3日の『人民日報』であった。
- 19) 1959年4月17日から29日に開かれた政治協商会議第三回全国委員会第一次総会での発言原稿である。
- 20) 『顧頡剛年譜』、10月、民主促進会に入会した（357頁）。
- 21) 対聯、中国独特な対句。原文、恨昔日蒋介石扒開花園口、危害千里；喜今朝共産党建成東風開、造福萬民。
- 22) 1957年2月27日、毛沢東が最高國務會議第十一次（拡大会議）で、敵対的矛盾と人民内部の矛盾という二種類のまったく性質が異なる社会矛盾を如何に区別するか、また、如何にして正しく人民内部の矛盾を処理するかについて、重要な講話をした。同年6月、それを整理して「如何正確處理人民内部矛盾的問題」という題名で公開発表した。そこで人々の言論と是非を判別する六か条の政治基準を提出した。一、全国各民族人民の団結にとって有利か否か。二、社会主義改造と社会主義建設にとって有利か否か。三、人民民主独裁を強固にすることに有利か否か。四、民主的集中制にとって有利か否か。五、共産党の指導的地位を確固たるものにするに有利か否か。六、社会主義の国際的団結と世界の平和を愛する人民たちの国際的団結にとって有利か否か。その中、最も重要なのは、第二条の社会主義道路の堅持と第五条の共産党

の指導的地位の確保である（『毛沢東選集』第五卷、人民出版社、1977年、363－402頁）。

(GU Jiegang / CHEN Zhongqi and QUI Yanling)